

# 厳しい環境下で生き残る要諦は

## 地域ニーズに適應した 確固たるポジシヨンの確立

は高齢化率が14%で年々、人口が増えているにもかかわらず、近隣に核となる病院がありません。今後の医療需要の増加が期待できると判断してM&Aを行いました」

事業継承後は、1億2000万円をかけて大幅なリニューアル工事を行うとともに、医療機能も全床医療療養型から一般病床20床（うち亜急性期9床）、回復期リハビリテーション病床24床、医療療養病床43床のリハビリをメインとするケアミックスに方向転換。他院に先駆けて回復期リハビリ病棟を導入したという先行者メリットもあって、脳疾患を中心に病床稼働率はほぼ100%で推移。当初、医療区分1の患者が50%を占めていた医療療養型病床についても、松井徹二院長や看護課長が近隣の病院や介護施設を直接訪問し、受け入れ先確保に努めることで、現在は医療区分2と3の患者が85%を占めるまでに改善。事業継承後2年の段階で、早くも収支は黒字転換を達成している。



明石はくほう会病院

「人事考課制度の導入や接遇の専門家による研修などもあって、院内の雰囲気は大きく変わりました。事業継承を経て、全職員が病院運営に参画するという気構えも生まれてきたように思います」と、松井院長は手ごたえを感じている。一方、古城理事長は、「現在はうまくいっていますが、もともとは経営状態の悪かった病院。専門医を確保したうえで、リハビリ分野の機能を充実を図るとともに、医療行政や地域の動向を見据えながら柔軟な対応をしていくことで、経

営の継続性を確保したい」と語る。高機能病院との連携に注力しゲートキーパーの役割担う

「専門性を前面に打ち出して、高機能病院と競うつもりはありません。開口一番、こう語るのは医療法人医仁会 譜久山病院（116床）の譜久山副院長だ。

同院は明石市内で、古くから消化器外科に定評のある病院として地域からの信頼が厚く、譜久山院長も患者中心の姿勢を崩さない。

「消化器疾患のなかでも自分たちの得意とする分野は胃および大腸。それ以外の消化器部位や悪性腫瘍の手術に関しては、適切な専門医療機関を紹介することを第一に考えています。私たちは、地域の患者さんに最適な医療を受けていただくための調整を行う消化器疾患におけるゲートキーパー的な役割を果たしたい」

白らを「ゲートキーパー」と称する消化器疾患に関しては現在、兵庫県立がんセンターなど高機能病院と連携し、検査や化学療法など長期的な治療が必要な患者の受け入れをはじめ、往診による在宅でのターミナルケアまで行うことのできる体制を整備。今後は回復期リハビリテーション病棟や緩和ケア病棟の開設も視野に入れているという。

連携先の確保とともに地域の医療水準の向上をめざし、2005年度からは近隣の医療・介護関係者を院内に招いた各種勉強会を実施。またホームページ上に、院長はじめ各部署によるブログを開設するなど広報活動にも積極的に取り組んでいる。

「顔の見える関係づくりを進めるとともに、自分たちのスキルも向上させていくことで、地域連携の中心としての存在感を強化していきたい」と、譜久山院長は意欲を見せる。

官民一体となって協調路線を歩んできたという歴史的な背景から、これまで競争原理がそれほど働いてはこなかった東播磨医療圏。しかし、水面下では病院間のサバイバル競争が始まっている。厳しい状況下で生き残っていくには、前述した各病院のように、地域ニーズを分析したうえで、早急に自院の旗幟を鮮明にしていくことが必要だ。



医療法人医仁会 譜久山病院